

京大理学部植物園事件の衝撃

京大理学研究科 大石高典

ぼくは、今、大学院の理学研究科に籍を置いて研究している。専攻は人類学。名前は難しく聞こえるけれど、アフリカの人と熱帯雨林のなかでつき合うことを通じて、いろんなことを勉強させてもらっている（これについては後日、別に投稿予定です）。

ところがアフリカから日本に帰ってくると、同じ理学部の教官、日本の植物の多様性の研究において指導的な立場にあるという教授が、こともあろうに自らの大学の植物園に生える樹木群の「伐採命令」を出し、それが多くの人の耳目に触れる前に強制執行されていたという。この衝撃はいろんな意味で大きい。大学において、その恩恵を受けている者としてはとくに考えるべき点が多い。

この「事件」について、今後その問題性がいつそう明らかになってくるであらう点を挙げてみることにする。

・植物園に植えられた植物は国の財産である。これが勝手に切られたという点。

・その過程で、植物園の利用者への十分な周知も議論もなかったということ。

・切られた木のなかには、日本では希少な標本木が含まれていたこと。

（たとえばヌマスギ *Taxodium distichum* の大木など。）

・伐採に疑問を感じ、反対意見を持つと判断された職員に対して解雇を一方向的に宣言して、口を封じようとしたこと。

・伐採にいたるプロセスについて、組織的な隠蔽が図られようとしていること。

もつとも、謎なのは、なぜ、これらの植物が切られる必要があったのかという点である。「環境整備」と称して、数十本もの木が処分された理由に

ついて、合理的な説明がされないのはおかしい。

「周辺住民からの苦情（落ち葉が植に詰まる、など）」が理由に挙げられている様だが、伐採前に実際の被害についての詳しい検討が行われておらず、それだけでは貴重な種まで含めた数十本の木を処分する必然性は認めがたい。

これらの植物はなぜ切られねばならなかったのだろうか。果たして本当にその必要があったのかどうか。伐採命令を出した当の教授には、ぜひ、本当の理由を語ってほしいと思う。

理学部当局は、「植物園は理学部のもの」なのだから、どうしようと勝手だろうと開き直るが、はたしてそうだろうか。地権者の権利のもと、同意なき伐採（あるいは生の切断）が行われるのは、日本の一般社会ではありふれたことかもしれないが、ここは大学である。忘れてはならないのは、これが知的探求を存在の基盤とするはずの大学において行われたという点だ。表向きには植物の「進化」と「生物多様性」の重要性をよりどころに予算をとって研究をしている人間が、裏では

「どんな大木ももとは一粒の種なのだから、(切っても)いつでもつくれる。ただ大きくなっただけ。」などと
いうようなことを言つて植物園の木を切りまくつて平然としていられるような大学では世も末だ。

一個体、一世代の生き物が生きる時間の価値を否定して、いったいどういう進化研究をしようというのだろう。

さらに人間として許せないのは、異を唱えようとする者の声には耳を貸すどころか、教授としての立場にものを言わせて無理やり従わせようとする野蛮さ、傲慢さだ。このような、大学内の小さな権力をかさにきた国有財産の暴力的破壊行為は、税金を払っている国民に対する背任というだけでなく、大学で真摯に学問、知的探求を志す者へのあからさまな冒瀆にほかならない。

このような伐採がどのようなシステムのもとで、どうやって可能になったのかということも、きちんと明らかにされる必要がある。今、京大植物園は、伐採命令(つまりは植物園管理)の責任主体がいまいにされたまま、次の管理主体への移行がなされようとしている。これはあたかも不透明な伐

採のプロセスにふたをして責任逃れをしようとしているかのようである。

この問題は社会的な「事件」にならないようにと、理学部内で隠密裏に処理されようとしているが、そのような解決法は学ぶ自由を標榜する大学の学風にも、理学部植物園が被った損失の大きさにもみあわない。大学の役割やそこでの学問というものについて、理解を深めるために、このような問題はきちんと社会化され、スキヤンダルとしてではなく、より本質的なレベルで議論される機会が作られるべきである。(表題をあえて「事件」としたのもそういう意図のためである。)

京大理学部当局の関係者には、面子や世間体にとらわれることなく、この問題に関して理学研究の名に恥じない本質的かつ建設的な解決を情報公開の透明性のもとに求めていきたい。

そして、一体どんな植物園がふさわしいのか、というような大切な議論には、ぜひ多くの実際の利用者、恩恵を受けている人間、そして被害をこうむっている人間にもなんらかの参加の道を開いてほしいと思う。内部の人間として、研究に忙しく、こういった面倒くさいことが、苦手だというのはよ

くわかるけれども、実際さまざま人と人との関わり、人と自然との出会いが植物園によつてもたらされているということ、それが学問にもたらす恩恵をわかつて欲しいと思う。

京大植物園は今や、墮落する大学のなかで、権威やお金によらず個性的な存在を主張する貴重な場所の一つとなつてしまったかのようなものである。もちろん、それが可能なのは園丁である中島さんをはじめとする植物園をこよなく愛する人間の存在なのだということ。植物のありのままを見せようという「生態植物園」として構想された京大理学部植物園は、そういう人たちによつて長い間維持され、また大学の内外を問わない多くの人々によつて、猫かわいがりな愛され方ではなく愛でられてきたのだ、ということを知った。そういう場所で今回のような「不祥事」が起こっているのは皮肉なことだけれど、これをきっかけに、心ある人が京大植物園を知り、どんな自然もそこに関わる人間のありようと表裏をなしてあるものなのだというあたりまえなこと気づいていく方向に進むことを願つてやまない。